

自己拡大のために教育はいかにあるべきか

How should be the Fundamental Education for Self-realization?

丸山 博道

Hiromichi Maruyama

目次

- | | |
|-------------------------|---------------------------------------|
| I. はじめに | V. 知欲の冬眠現象の諸要因 |
| II. 教育が大自己を目指すべき理由 | VI. 調和ある自然・社会生態系の学習と
適塾流の世俗的教育法の結合 |
| III. 経済社会の変容が脳の発達に及ぼす影響 | VII. 世俗的欲望を梃子にした自己拡大 |
| IV. 知欲ジェネレータの発達 | VIII. おわりに |

I. はじめに

この小論では、次の2つの問題の解決に向けて議論する。

1. 教育は大自己 Self の実現を志向していない。
2. 教育は自己拡大の動機づけに失敗している。

この両者を同時に根本的に解決するための教育として唯一正当な方策は、次の通りである。

子どもたちの自己拡大のためには、世俗的欲望の生成ジェネレータ（欲望を生成すると想定される脳内システム）の発達段階で、その欲望が生態論的調和を志向するように介入すること、すなわち大自己を志向するように介入することである。

われわれは、なぜこのような結論に導かれるのか、また、大自己を志向し始めた子どもたちにとっては、いかなる教育体制がふさわしいのか。また、大自己を志向していない現行の学生に対しては、いかなる教育体制が考えられるのかについて議論する。論点は、次の2点に収斂する。

1. 教育は、なぜ大自己実現を志向せねばならないのか
2. 教育は、世俗的欲望をいかに動機づけに活用できるか

さて、第1の問題は、教育は、自然生態系の痛みを自分の痛みとして感じられるような人間の育成に真剣に取り組んでいないということを指している。

標題にある大文字の S から始まる Self-realization すなわち大自己実現という言葉は、ノルウェイの哲学者で、Deep Ecology 運動の提唱者である Arne Naess に由来しているⁱ⁾。それは生命

の連関を自己の世界の根底に据えることを意味している。Naess は彼の Ecosophyⁱⁱの第一原理として、「大自己を実現せよ！」という規範を置いているⁱⁱⁱ。しかし、これは永遠の営為である。この大自己実現に向かうためには、Naess がそうであったように、自然世界との幸福な出会い、存在の様々な側面への気づき、存在の精妙性や尊厳に感動する体験の積み上げ等が必要である。ところで、職業に就くための新たな知識や技能や感受性を習得させる教育でも、自己拡大には違いないが、そのような教育が、子どもたちの大自己志向を導くという保証は何処にもない。II 章では、なぜ、こうした保証が必要なのかを議論する。

第 2 の問題は、子どもたちの脳は、学齢直前に目覚ましい発達を遂げるものの、学齢期になると、次第に冬眠したように知欲が減退し、それに依存した教育は機能不全に陥っていく傾向があるということを指している。これについては、III、IV、V 章で議論する。

教育は、基本的に、生徒・学生の知欲に依存した学習の動機付けをしてきたが、知欲は、学校教育の宿命的問題（V 章、第 2 段落参照）や生育環境の悪化によって減退し、それに代わって、物・金・名誉といった世俗的な欲求が増強されていく。また、病気や障害を持つ子どもたちは、生きたいという生命的な欲求を強めていく。知欲を有する者には、もっと速やかに、さらに広く深く、世界を学習させねばならないし、障害や病気を迂回しながら生きようとする者には、医学的な支援体制の中で、模索的・実験的な教育が追求されるべきである。しかし、世俗的な欲求だけを強めた多くの子どもたちに対する教育は、どのようであるべきなのか。彼らの欲求エネルギーは、全体としては決して小さくはないが、その欲求は多岐にわたり、しかも個々の欲求は容易に満たされ易く、自己拡大のエネルギーに転換し難いという特徴がある。VI、VII 章では、この難問解決に向けて議論する。

II. 教育が大自己を目指すべき理由

自己の作り出した認知世界は、実世界の写し絵に過ぎないが、自己にとっては唯一の生きた世界である。相互に依存し合う生命の連関を綿密に現象化し、それを自己の世界に取り込むことで、生態系の痛みは己の痛みとなる。Naess の提唱する Deep ecology 運動は、持続的開発を合理化した環境運動^{iv}とは明らかに異なっている。彼の哲学は、連関として存在する生命本来のあり方が攪乱されていることを、己の痛みとして捉えるところから出発している。それが、Naess が、規範「Self-realization!」を彼の ecosophy の第一原理として置く所以である。

こうした視点は、animism ないしは多神教とも全く異なったものである。彼の認知世界は、幼少期からの徹底した自然観察と、存在を関係として現象化することによって成り立っているからである。詳細に全方位的に現象化された存在の精妙な連関の中に、存在の尊厳を感じ、生命を感じ、同朋を感じることがあるとしても、彼は、自然を、端から「人間的な畏れの対象である霊魂を帯びたもの」としては捉えてはいない。自然は、瑞々しく現象化されたものであって、霊魂が人間的に暗躍する舞台ではない。

Animism を自然保全のために唱道しようとする考え方もあるが、animism がいかに失われていったかということについての議論はあまりなされてはいない。Animism もまた、文明の生み出した人間の所産であって、別のより優勢な文明の前では、その精神性はいとも簡単に崩れ去ることが運命づけられている。実際、1950年代頃までは、日本各地に多神教信仰は色濃く残存していた。各地の湖沼には弁財天や水神が祭られ、湖沼の水は非常に厳重に管理され、上水として利用されていた。しかし、周囲の民家に水道が敷設されるや、湖沼はたちまち下水と化し、魚影は姿を消していった。人間が自然に対して抱いていた畏れは、それは人間中心的なものであって、決して生態系の痛みを同一化したものではなかった。

一方、持続的開発を可能にするために生態論を悪用しようとする人間中心主義的な環境運動が、企業や学校などの組織の中に移植され、その形式の維持のために無益な労働が強いられているのを目撃する。欲得と二人連れの環境運動でも、環境の悪化を改善する一定の効果はあるが、経済効果がなければ、あるいは収益性がなければ、そこで停滞する運命にある。Eco とは、もともと oikos すなわち家、家族あるいは同朋の謂いである。1960年代の苦い笑い話ではあるが、豚の肝臓は 1/3 程度切除してもやがて回復するという。そこで、1/3 を切除しては食べ、回復したらまた 1/3 を切除して食べ、ということを繰り返せば、相当に持続可能であるというのである。Eco とは、この 1/3 を弁えることなのか、あるいは、その都度切除される豚の痛みを感じる事なのか。

ところで、「神の前の自由」という言葉は、教会権力や封建権力から利権を守るための近世の bourgeoisie の発明であると理解しているが、その本来的な意味は、創造主の意向に適った自由であり、天然自然の法則に従う時にのみ許される自由である。環境運動と呼ばれるものも、持続可能な開発のために仕組まれた利権がらみの環境運動と、自然生態系の痛みを感じながら、それを自然本来の姿に戻そうとする環境運動では、いずれが本来の「神の前の自由」を希求するものであるかは明白であろう。教育という行為は、限りなく洗脳に近い行為であるだけに、常に「神の前の自由」を希求していなければならない。

現在、日本の組織に広く導入されている環境運動は、持続的な経済活動を可能にするために発明された欲得と二人連れの活動であり、欲得の薄い学校内の運動としては、たちまち形骸化してしまうものである。Naessによると、かつて北欧の子どもたちは、夏になると、野外生活を体験し、日常の行き過ぎた豊かさや浪費を、繰り返して反省し、心底に焼きつけてきたものだというのが、生命の痛みを身体化する教育などまったく行われていない日本では、どのような「環境運動」であれ、その持続は困難である。ほとんどの日本人は、環境を改善する唯一の手段は環境技術であって、画期的な技術が登場するまでの辛抱が、括弧付きの環境運動であると思っている。

しかし、一方的に有効である技術などはあり得ず、それはまた新たな不自然を生み出すことを覚悟せねばならない。技術というものは、自然の原理に基づくものではあるが、その原理を発現させる「仕掛け」に作為があり、不自然さがある。創造主は、それを発現させる遣り方を含めて、自然さを規定しているのである。

欲得と二人連れであれ、技術に依存したものであれ、緊急時にはできるものから手を付けねばならない。しかし、それだけを以て環境運動とは言えないし、持続可能でもない。運動の基本は、生命の痛みを身体化し、神の前に自由である生き方を体得して行くための教育でなければならない。しかし、「Self-realization!」というのは、実は相当な知的作業を必要とするものである。生命の連関を根底に焼きつけるには、生命のあり方を克明に観察し、現象化し、その存在のあり方の精妙性と尊厳性を感得する必要がある。そこには情緒性と科学的精神の一体的発達が必要であるが、Naess はそれを幼少期から培ってきたのである。

われわれは、それを教育として行っていくことを考えねばならない。その骨格は次の 2 つの側面を持たねばならない。

1. 全方位的な観察

2. 全方位的な現象化

観察は、データを取得する手段である。これはあらゆる知的活動の基礎である。現象化は、データを分析して、存在のあり方を浮かび上がらせることであって、これ無くして、データに語らしめることはできない。こうした基本的な認識法は、研究者の独占物ではあり得ない。それはむしろ人間に課せられた普遍道徳である^{vi}。なぜなら、これを実践しなければ、創造主の意向が確認されないからである。それゆえ、筆者は、存在性を全方位的に現象化することを以って、*ecosophy* の第一原理とすべきであると主張してきた^{vii}。

この国の教育は、大自己の実現を志向していないというだけではない。結局、存在を連関のうちに捉えるための認識方法^{viii} が教育されていないのである。我が国の教育理念は明治以来「立身殖産」であったから、そのような教育は不要であると考えられがちであるが、この教育レベルでは、立身殖産も危うくなってきている。なぜなら、今や立身殖産といえども、高度な知識や技能が必要になっているが、それにも関わらず、労働環境の悪化に伴う、子どもたちの生育環境の悪化が彼らの世俗的欲求を強め、知欲を抑制し、学習量を決定的に減少させてしまっているからである。小論の結論を先取りして言えば、冬眠状態にある知欲に依存しても、教育効果は上がらない。様々な方向に湧き出る世俗的欲求を大きく一つの流れに整流し、そのエネルギーを学習の動機づけに活用するような教育体制を考案することが必要である。

ただし、物欲・金欲・色欲などの様々な方向に湧き出す欲求を大きく一つの方向に整流するとすれば、唯一教育として許されることは、神の意向に沿おうとする欲求、すなわち、自由への欲求でなければならない。そして、自由への欲求は、結局、全方位的な観察と現象化の訓練を、おのずから求めることになるのである。オバマ米新大統領は「神の前の自由と平等」をベースに就任演説を行った。格調はあったが、しかし何とも古典的な価値観を持ち出したものだった人多かったであろう。この 21 世紀にふさわしく生態論的精神性を高らかに唱導してもらいたかった。しかし、神の前の自由を追求するならば、おのずからその精神性に導かれるというのが上の主張である。

世俗的欲望を満たそうとしたら利害対立を惹き起こしそうになったとすれば、その欲望の満たし方は神の意向に適っていないということであろう。しかし、世俗的な欲望が芽生えることは、如何ともし難いのに、それを満たそうとすると、たちまち不自由になるとすれば、それはまさに苦悩と言うしかない。それゆえ、世俗的欲望の処理を間違った人間をただ処罰するだけの社会は、本当に自由を希求しているとは言えない。本当に自由を希求するならば、子どもたちの世俗的な欲望ジェネレータが未発達な段階で、明確に教育的に介入して、それが天然自然に調和する欲望だけを生成するように、その成長を導かねばならない。

しかし、括弧付きの自由主義者から見れば、これは洗脳だと言うかもしれない。だからこそ、その教育が、神の意向に沿っているということが、すなわち、自然なことであるということが、聖書によってではなく、創造物によって、厳しく吟味されねばならないのである。多くの人は、物欲・金欲・色欲などを持つことは避け難いことであると考えているようだが、そうした欲望は生育環境に依存して、様々な強度を有するようになるということを指摘しておきたい。子どもたちが幸福になるような欲望を持つように、生育環境（教育環境）を整えてこそ、成熟した社会なのである。

III. 経済社会の変容が脳の発達に及ぼす影響

動物の学習訓練には餌付けを用いるが、それが可能なのは、動物たちに食欲があるからである。欲望のないところに動機付けは不可能である。したがって、欲望生成ジェネレータへの教育的介入と、欲望の教育的活用などということは、余りにも当然であって、何ら新しい要素は含まれない。しかしながら、メタ認知研究の教育への応用などを垣間見ていると、自己をモニタし制御するためには、「自己の温存・拡大」という自我の欲望が大前提であるということ^{ix}が、忘れられているのではと疑われるものが散見されるし、大学の講義などでは、筆者も同罪であるが、学の体系ということが強く意識され、多くの学生の世俗的欲望と大きく乖離した状況が続いてきている。

筆者は、「知性のために教育はいかにあるべきか III」において、幼児期における子どもらしさの発達が、知の発達においてきわめて重要であることを強調したが^x、生徒あるいは学生に対する教育や、筆者自身の育児経験からは、知欲の生成ジェネレータの発達のピークは、現在の諸条件の下では、学齢開始前後にあると推測している。もし、これが正しい推測であるならば、学校教育はほとんど、発達済みの、あるいは未発達が運命づけられた知欲ジェネレータに過剰に依存してきたということになる。

ところで、知りたがらない脳が、自己のモニタと制御といったメタ認知的戦略を、知るという目的のために、自主的に採用するものだろうか。余程知る必要性を認識しない限り、その答えは否定的であろうと思われる^{xi}。しかし、それにもかかわらず、自主的ではなくても教育的に繰り返し介入することで、いずれそうした戦略は運用されるようになり、知りたがるようになるといっ

た淡い期待が蔓延しているふしがある^{xii}。よしんば、そういうことがあり得るとしても、そうしたことが成功する確率は極めて低いのでなければ、現実によく存在する知欲の冬眠状態を説明することはできない^{xiii}。

学校教育は、知欲に依存し過ぎて、子どもたちの発達に十分な寄与ができてこなかったのは明らかである。また、一方で、十分な知欲を持つ子どもたちに対しては、その知欲に適うだけの十分な寄与ができずにきている^{xiv}。教育の目的は自己拡大の支援であるとすれば、自己拡大の梃子とすべき欲求ジェネレータがどのようなものであるかを見定めた上での実践でなければ、成果は上がらないであろう。

欲求のジェネレータは知欲のそればかりではない。その発達時期は特定できないが、人間には、物欲・金欲・名誉欲・色欲といった世俗的欲望や、病気や障害を克服して生きようとする生命欲など様々な欲求が、芽生えていくのであるから、そうした欲求も、自己拡大上の、すなわち教育上の大きな梃子になり得るはずであるし、すべきである。

しかし、知欲以外のこうした欲求は、いずれ誰しものが、その生育環境に依存して、様々な強度で有するようになり、時には知欲を凌駕することも稀ではない。したがって、知の誠実さにとつて絶対の価値である純粋な知欲を、世俗欲を梃子とした教育が汚染しないように配慮することも忘れてはならない^{xv}。

それゆえ、当面、学校教育というものは、自己拡大の梃子とすべき欲求ジェネレータによって、少なくとも、3種類以上に分割されることが望ましい。明治以来の日本の教育理念は、立身殖産にあったから、基本的に世俗的な欲求充足が目指されてきたわけだが、教育の現場ではむしろ知欲や生命欲を前提とするような、「ねじれ」が存在してきたと言えるであろう。しかしこうしたねじれた遣り方で、教育効果を上げることは、少なくとも筆者の経験では、ほとんど不可能であるように思われる。

実際、筆者の教育などは、一部の特に学力のある学生や、病気や障害のある学生には、若干の支持はされてきたものの、その教育効果は、統計的に見れば、時代とともに低下し、今では底を突いている状態である。学生による授業評価調査によれば、多くの先生方は、むしろ非常に高い支持を受けておられるので、筆者としては問題の所在を明らかにする必要に迫られてきた。筆者は、この論考以前には、知欲の普遍性を信じていた。自己拡大の梃子とすべき欲求ジェネレータに選択ミスがあったのである。この認識によって、確かに問題は半ば氷解した。しかし、残る悩みの第一は、異なるジェネレータを有する学生を混在させることは、ほとんど動機づけを必要としない知欲を有する学生の学習効率を甚だしく損なうということである。そして、第二の悩みは、筆者自身が世俗的ジェネレータを喚起する適性を十分には持ち合わせていないということである。教育体制が分割されない限り、学生にとっても、教師にとっても解決できない部分が残される。

しかし、学校教育の欲求ジェネレータによる分割は、特殊教育の例に見られるように、そう簡単には受け容れられないであろう。多くの国民は、それによって子どものキャリアに大きな格差

が生じるかもしれないことを危惧するからである。しかし、無論それは杞憂である。知欲の士は、科学・哲学・芸術などの世界でこそ不可欠であるが、経済社会では、必ずしも適性を有しない人々だからである。多くの国民は、もっと世俗に適合した教育を受けられるのであるから、親の教育投資はより有効になるはずである。また、病気や障害を有する生徒・学生に対して、現状の一般教育を施しても、本当の意味での自己拡大は達成できない。一般教育では、おおむね、「健常者が世俗社会へ適合するための教育」が目指されているからである。病気や障害を有する生徒・学生が地道に自己拡大を達成するには、個々の病気や障害を科学し、それを迂回しながら拡大を図る様々な方策を探索するような、研究に根差した教育訓練が不可欠である。

どのような人間も、それぞれの環境に依存して、多かれ少なかれ、世俗的な欲求ジェネレータを有するようになるが、その時、大切なことは、知欲や生命欲との調和が取れていることである。しかし、経済社会のバブル化とともに、世俗的な欲求ジェネレータだけが突出して強化され、他のジェネレータが機能不全に陥っているとすれば、自然・社会生態系にとって、けっして幸福なことではない。

現在、金融バブルが崩壊して実体経済が縮小したと云われているが、実は、実体経済と言われているものでさえ、地球や人間の真の必要という観点からすれば、実に不要物の生産と消費の活動であって、必要に根ざした真の実体経済からは大きく乖離したもので、すなわち、バブル経済そのものである。現在の経済は、泡の上に泡が積み上がった不安定なもので、多くの人間が依存すれば、それだけ多くの人間が不幸に見舞われるということが運命づけられている。

したがって、世俗的な欲求ジェネレータを梃子にした教育は、世俗的欲望をただ刺激すればよいというものではない。自然生態系との調和がなければ、また社会生態系としての調和がなければ、一切の世俗的欲望は水泡に帰するものである。もし、現状のバブル社会の中に職を求めるためだけの動機づけがなされるならば、社会の不安定化傾向はますます固定化され、絶えず不況の波に翻弄されることになるであろう。

しかし、彼らの世俗的欲望を規制したのでは、それを自己拡大の梃子にすることはできないから、その生成ジェネレータは、自然・社会生態系と調和する欲求だけを生成するように TUNING されることが必要である。それを可能にするには、勝手な欲求に塗れる前に、「望ましい自然・社会生態系における幸福な存在のあり方」を学習させて行く以外にはない。世俗的な欲求は彼らが棲み込んでいる不幸で小さな関係場の中で生成されてしまうので、この教育実践は、世の中との壮絶な闘いでもあることを覚悟しなければならない。

この経済社会の泡に塗れた多くの親にとって、親子の共同作業^{xvi}の中で、子どもたちの知を育てていくゆとりは制限されている。子どもたちは、誰に褒められることもなく、やがて、金欲・物欲の徒になっていく。そうした子どもたちにとって就職を望むのは、至極当然の成り行きである。しかし、それは親から子への負の連鎖が生成されていくことを意味する。教育には、こうした子どもたちを救い取る歴史的役割が担わされている^{xvii}。

泡に塗れた社会が生み出していく知りたがらない子どもたちは、とても5割では足りない。彼らは、その数の大きさのために、そう見られることは余りないかもしれないが、考え方によれば、知欲ジェネレータの発達障害者たちである。もし、その発達の臨界期が学齢前、あるいは学齢期初頭にあつて、その後の回復が困難であるならば、これはあながち見当外れな言い方ではなかろう。知りたがり・遣りたがり・参加したがるのが、子どもの常であつたはずである。社会の歪みもたらす脳の変調の可能性について、大いに関心を持ち、社会改革に向かうべき時が来ている。

IV. 知欲ジェネレータの発達

知りたがり・遣りたがり・参加したがる子どもの心性はどのように発達して行くのであろうか。生後2か月の乳児に、掛け声と共にグー・チョキ・パーの指運動を繰り返し見せると、目を輝かせて、自分の手を動かそうとする。むろん、まだはっきり指を立てることはできないが、明らかに反応的な動きをする。空腹や睡魔のために機嫌の悪い時でも、グー・チョキ・パーを見せると、泣き止み、そして手の動きに反応する。抱きかかえて、鏡の中の本人を見せると、明らかに特別な関心を示すし、鏡に手を触れさせると、自分から鏡の中の手を触ろうとする。また、明るい電灯を飽きずに、考え深げに眺めていたりする。人間は、生まれて目が見えるようになると、直ちに、繰り返される動きや、鏡像や、明るいランプや、それに周囲の大人たちの表情に敏感に反応するようになる。

彼らのこうした反応は、その眼差しの強さや、目の向け方などから判断して、意識的な行為であると考えられる。また、3ヶ月頃になると、母親の姿が見えなくなると、むずかたり、大泣きしたりするようになるが、これは、「世界の中に己を定位すること」を意識し始めていることを示している。意識というものは、既存のROUTINEで解決できない時に、生じてくるという経験則からすれば、外界の認知などの表層的な機能ほど、照合すべき図式が少ないために、意識化され易く、世界の中に己を定位するような、機能階層の深い処にある戦略的・中枢的機能ほど、意識化はされ難いはずではあるが、新生児の意識化の様子を観察していると、その深まり方は想像以上に速いことが分かる。また、獲得された図式はまだ少ないとは言っても、その獲得は胎児の頃から始まっているのは明らかである。その一つの例が、[血流音-安心]の図式である。2〜3ヶ月頃までは、むずかる子に、血流音に似せた多少濁ったサーサーという音を聞かせると非常に穏やかになる。しかし、その期間は短い。世界の中に己を定位するためのもっと重要な図式が優勢になっていくためであろうと考えられる。

知りたがる気持ちというものは、第一義的には、世界の中に己を定位しようとする非常に潜在的な「自我の戦略」に応える働きである。その意味では、この気持ちは誰もが有しているはずの気持ちである。しかし、その気持ちによって、結果として、己を世界の中に幸福に定位できたかどうかということが、そうした気持ちが強化されるかどうかにかかわってくる。

一般に、知り得た世界が己にとって自己拡大的であれば、知りたがる気持ちは強化される。また、知りたがる気持ちそのものが、評価されることがあれば、子どもの気持ちはより強化される。さらに、重要なことは、世界を知るその作業が、親子の共同作業であれば、構築されていく世界そのものが、親子の共有物であり絆であるから、それは、胎児が聞いていたあの血流音のように、知ろうとする気持ちに全幅の信頼感や安心感を付与するはずである。

乳幼児におけるメタ認知の発達についての研究はまだ十分なされていないようだが、2歳以降になるとその発達は次第にはっきりしてくる^{xviii}。メタ認知は、「内なる他者の目」と表現されることがあるが^{xix}、他者のまなざしで自己を見る（モニタする）ことができるようになるためには、その自己が幸福であって、そしてモニタすることによって、もっと幸福になるという期待がなければならぬだろう。その他者のまなざしは、世界の中に自己を定位せよという深い要請を受けて、外界を把握しようとしている自己を見つめているわけだが、実際に見つめることができるのは、見つめることが幸福である時だけである。幸福でなければエネルギーは持続しない。その意味で、胎児期を含めた生育環境の相違が、その後の知欲に大いに影響を与えるであろうことは想像に難くない。

内なる他者のまなざしで自己を見ることの中には、自己の気持ちを観察するということも含まれるから、次第に状況と感情の関係図式を獲得していくはずである。しかし、そうした図式も直ちに他者の心に適用されるわけではない。適用されるためには、緊密な人間関係の中での適用訓練がなされ、その結果として、さらに緊密度の高い人間関係が生成されるという幸福な経験が必要である。そうしたメタ認知的適用訓練は、子どもが最も信頼する者たちによってじっくり施されねばならない。「心の理論」というものは、こうして一般に3歳頃までに獲得されていく。自閉症児は、「心の理論」を獲得し難いという特徴があるわけだが、RDI^{xx}（対人関係発達介入法: Relationship Development Intervention）によって改善が見られると言われている。この療法は、母親との経験を共有する喜び^{xxi}の中で対人スキルを獲得させようとする療法であるが、上で述べた幸福な経験とは、まさに経験共有の喜びを味わうことである。

子どもたちの多くは、学齢期直前の5～6歳になると、物語の素晴らしい作家に成長する^{xxii}。彼らが作り出す物語には、様々な装置が動員され、大きな局面の展開の中に人々を惹きつけ、最後は、人々の気持ちを安堵の内に終結させるといった優れた技量を発揮する。そのまま育って行けば、天才的な作家になるだろうと、誰しもが信じるほどである。彼らは、すでに、様々な物語の展開図式を獲得し、人間の心の機微を理解し、筋道の立った文章を紡ぐ力を持っている。メタ認知の研究によれば、記憶をモニタする能力などは、学齢期を通して発達して行くことが報告されているが^{xxiii}、なぜ彼らは、そのまま、大作家に育って行かないのだろうか。また、知りたがらず、文章も書けない大学生はなぜ生まれてくるのだろうか？こういう学生は、知欲の発達に障害があつて、不幸にもあの5～6歳の輝かしい時を経験してこなかった例外的な者なのだろう

か。しかし、ほとんどの学生が、あの時の輝きを失ってしまうとすれば、それは明らかに、学校教育の期間中に何かが起こっているということであろう。

V. 知欲の冬眠現象の諸要因

学校では、さまざまな科目に分断された知識が、十分な動機付けもないままに、子どもたちに提示される。子どもたちはそれを記憶し、類似問題に適用するといった訓練を延々と受ける。その時、構造的に理解することが、知の構成上欠かせないにも関わらず、それについてはあまり触れられることはない。たとえば、計算はできればよいのであって、計算原理からその方法を知る必要はないといった世俗性が横行している^{xxiv}。それでも、子どもたちの中に、知的な構造体が雑然とではあるが集積され、ぼんやりながら結びついて、世界を知るための図式として機能する場合には、そのような訓練も意味ありげに見えてくる。世界の内に自己を定位するという潜在的欲求を満たすことに成功している子どもたちにとっては、新しい図式を仕込むことは、それなりに、有意義なことではあるが、知を構成する上での不満は数限りなくある^{xxv}。

さらに、新しい知識を、世界を理解するための図式としてではなく、その習得を、存在評価を受けるための新たな課題としてしか、捉えられない子らにとっては、それは次々に繰り出される耐えがたい拷問道具のようなものであり、時に、それが世界を理解するための道具であるなどと言われれば、そのような世界に対して敵意さえ感じられても不思議ではない。とても知欲など湧いてくるものではない。こうした知欲喪失は、子どもたちの自己拡大を支援するのではなく、産業界のための人材を養成している学校教育の宿命的問題と言えるものである。

知欲冬眠の第二の要因は、親子のふれあいの希薄化であり、世俗的欲求の突出である。その背景には親の貧困/貧困化がある。昨今の金融バブルの崩壊を含めて、そこには数度にわたるバブル経済の崩壊による深刻な不況があった。こうした状況下で、労働環境は著しく悪化し、平均年収は10年連続して減少している。また、心を病む者たちの急増、子育て環境の崩壊、学校の荒廃、少子化、子どもたちの学力低下、子どもたちへの自立の強要、そして、貧困若年労働者の急増が起こっている。

親の貧困化、子どもの放任、自立の強要^{xxvi}は、子どもの知の発達の大きな阻害要因と直結している。知的に褒められたことのない子どもは、世俗的な欲求を強める。それに対して、褒められて育った脳は、世俗的な欲求を満たすことを敢えて求めない。これは、褒められた時の脳の活性化部位は、金品をもらった時の活性化部位と同じであるということと関係があるかもしれない。人間は常に世界の中に幸福な自己を追い求めているからである。知欲が発達しない一方で、世俗的欲求を発達させることは、自立の強要と不幸な出会いを引き起こす。世俗的欲求を満たすために自立は必要であるのに、自立のための学習ができていないというミスマッチが起こるからである。こうした傾向は、ここ数年、とみに顕著になってきている。

なぜ学齢前のあの輝かしさが、学校教育の期間中に、失われていってしまうのかということについては、次のようなさまざまなことが指摘できるが、どれをとっても、親の貧しさ、特に生き方の貧しさ、それを導くこの社会の生態論的精神性の貧しさというものが、見え隠れしている。

1. 学校教育が次々に提示してくる新しい知識の習得へ、意識が奪われ、物語を創造することから、目をそらされているうちに、物語に関する様々な図式が解体してしまう。
2. 学齢前には親子の共同作業が存在していて、物語の読み聞かせや、創作の時間があつたのに、学齢期になると、親の職場復帰とともに、急速に学校への「教育の丸投げ」が起ってしまう。
3. 学校教育への不適合の他に、労働環境の悪化などがもたらす「親の貧困化、親からの放任、自立の強要」などによって、世俗的欲望が喚起され、物語作成のような知的行為に意味を見いだせなくなってしまう。

知欲の冬眠は、学校生活の終盤になって、いよいよ世俗的欲望を満たすための就職ということが念頭に上ってくると、漸く、目覚め始めるが、多くは間に合わない。最も脳が発達し、多くを学ぼうる期間を、日本の多くの学生の知欲が冬眠してしまうということは、何としても残念なことである。何とかして、世俗的欲望を梃子に学習の効率を上げていくための教育戦略を打ち立てねばならない。

VI. 調和ある自然・社会生態系の学習と適塾流の世俗的教育法の結合

Arne Naess の著書「Ecology, community and lifestyle」の第4章、第4節によれば、かつて北欧の子どもたちは、ある季節になると、山小屋に泊まり、薪を拾って、暖を取るような、一種の野外生活 *friluftsliv* (free air life) を送る習慣があつて、日常生活に戻った時の、あり余る豊かさや、信じ難い浪費に対して、繰り返しい強い衝撃を感じてきたという。かつての北欧の子どもたちは、そのようにして幼い時から、自然の中で限りあるエネルギーを大切に使うことを学んだそうである^{xxvii}。日本での Eco 教育というと、リサイクルとか省エネとか再使用とか、人間中心的視点からの行動の奨励に終始しているので、その精神性は、たちまちのうちに瑞々しさを失って、形骸化してしまう。

Eco とは本来 *oikos* すなわち家族の謂いである。したがって、その運動の本来の目的は、自然生態系と触れ合い、それを自分の世界に組み込んで、生き物としての仲間意識を持つことでなければならない。リサイクルも良いが、その背後に生き物の痛みを感じてこそ、運動は持続されるのではないだろうか。筆者は、ISO14001 には、心からの賛同はできない。持続可能な開発とは、生き物の痛みを無視した言い方だからである。人間中心的な環境運動は、欲得と二人連れでなければ持続不能であるのに、なぜか、欲得の部分を隠して、その一面的な合理性ばかりが主張される。

欲求は隠すべきものではない。しかし Eco でない欲求は抑制されねばならない。何とも厄介な話である。本当に自然と共感し合える脳を作っていけば、Eco でない欲求など生まれてはこない。教育の第一歩は、ここになければならない。またその時、漠然と自然を眺めていても、その存在の奥深さは見えてはこない。存在を全方位的に観察し、全方位的に現象化して、存在の精妙さ・尊厳性に触れるといった経験を、積み重ねていく必要がある。情緒と全方位的な観察と全方位的な現象化作業とが相まって、子どもたちの精神は健全に拡大されていく。人間は、世界の中に自己を定位しようとする本来的な欲求を有している。人間の幸福感は、こうした深い欲求が満たされ、自己が世界と確固たる関係で結ばれていることを確認する時に、生まれてくる^{xxviii}。したがって、存在の尊厳性を味わうことは、幸福な体験である。そうした豊かな存在と結ばれている自己を確認することになるからである。

自然と調和した脳にして、初めてその欲求は大いに発揮させることができ、教育や自己拡大の梃子にできる。もし、これまでの教育が、知欲に依存し過ぎていたとすれば、それは自由主義的な世俗的欲求に対する信頼感がなかったからであろう。それらは調和を破壊するものとみなされていた。しかし、その欲求ジェネレータが生態論的な調和への欲求（大自己への意志）を生み出すようになれば、その欲求を梃子にして、学習を考案して行くことができる。子どもたちの世俗的欲求が一つの方向性を有するようになれば、その水量を利用した低落差発電が可能になる。就職して世の中に出た時に必要になるからといった遠い目的は、余程差し迫ってこないと、彼らを学習に誘う力にはならない。あの豊かなエネルギーをただ海に流し去ってしまうのは、本人にとっても資源の浪費である。

義務教育時代は、世俗的欲求の生成ジェネレータはまだ発達途上にあるから、上で述べたように、自然・社会生態系の体験実習に十分な時間を割いて、存在の幸福なあり方を、若く柔軟な脳に刻みつけていくことで、欲求生成ジェネレータが大自己を志向するように成長させて行くことが可能である。自ら孤立したり、泡まみれの不確実な環境に幸福を求めたりする愚かしい欲求が惹き起こされるのは当人の不幸である。この教育実践には、まだ知欲を梃子にせざるを得ないから、初等教育のできるだけ早い時期から開始されねばならない。

しかし、こうした欲求を具体的に学習に結びつけるためには、従来の、授業とは、余程違ったものを考えねばならないように思われる。いくら eco を志向していると言っても、個々別々の世俗的欲求をトップダウンで統制して整流するようなことをすれば、それ本来のエネルギーが損なわれてしまうからである。そこで、たとえば、同一年齢の集団ではなく、先輩・後輩が混在して切磋琢磨する緒方洪庵の「適塾」^{xxix}のような活動空間をイメージしてみるのは興味深い。まず、できるだけ類似の目的意識（欲求）を持った学生同士を集団化する。新入生のリテラシー教育は、先輩の仕事として位置づける。新入生の欲求が、先輩たちの多少身に付いた広い視野の中で、自然に刺激され、揉まれ、調整されて、一つの方向に大きく整流されるようにする。すると、そこには高い志が生まれてくる。そして、その大きな流れ（高い志）を学習の梃子として活用する。

教師の仕事は、リテラシーについては頻繁に試験を行い、席次を更新し、要所、要所で、目的（欲求）に適った課題を課し、発表させ、物事を深く全方位的に捉えるように全体を導いていくことである。

後輩に席次を抜かれるのは面子が立たない。先輩は勉強に励まざるを得ないだろう。学習環境も敢えて制約的なものにし、席次が上位にならないと良い学習環境が利用できないようにして、競争心を刺激する。これらは、まさに世俗的欲望を梃子にした適塾流の遣り方である。こうした遣り方は、ある意味で現在の学校のクラブ活動や、活性化された大学院研究室にも似ている。いずれにしても全体としての目的意識を強化し、集団自律的な学習に結び付けていくことが肝要である。

今の学生たちは概して試験を好まないが、それは、自己についての、既に予期している低い存在評価を、見せつけられるからである。むしろ、それを席次の更新といった暫定的であからさまな外的評価に変質させてしまえば、却って楽しめるものになるかもしれない。そのためには、試験は頻繁に行われた方がよい。

しかし、知欲の士には、こうした遣り方は好まれない。世俗的欲望を満たすことなどに関心がないわけだから、席次を競うなどということは、どうでもよいのである。そのようなものは自分の学習ペースをかき乱すばかりで、何のメリットも感じられない。自律的に自己を世界の内に定位してこそ満足が得られるのに、他律的に制御された遣り方では、余り生きているという感覚が得られない。また、世俗的欲望が外的・表面的に満たされると、問題の解明も終わってしまうような浅い学問では、まったく満足することはできないし、全方位的な現象化も浅いレベルに留まらざるを得ない。

大事なことは、教育体制を一つに絞ろうなどと考えないことである。人は自分の欲求ジェネレータを梃子にした教育を選択しなければ、自己拡大を達成することは困難である。教育体制を、欲求ジェネレータに沿って、分割することは、教育の自然な義務であろう。

VII. 世俗的欲望を梃子にした自己拡大

病気や障害を有する人々の生命的欲望の強さは、われわれの想像をはるかに超えている。彼らはそれを梃子にして、進んで自己拡大を果たそうとしている。しかし、なぜ、世俗的欲望を有する多くの学生たちは、自己拡大の欲望を眠らせてしまうのであろうか。その欲望を梃子に自ら自己拡大を図ったらよいではないか。

しかし、世俗的欲望というものは、それを満たすために、知欲や生命欲と違って、必ずしも自己拡大を必要としない。少々の物欲・金欲・食欲・色欲などは、アルバイトをすれば容易に満たされてしまう。彼らは、自己拡大を要する比較的大きな欲求については、お得意の方法で、欲求それ自体を麻痺させてしまう。車は高価で買えそうもないと思ったら、車に対する関心を麻痺させてしまうのである。しかし、それは、己の抱いた世俗的欲望を貶める行為である。自己拡大の

ためには、貶めることのできない欲求であることが必要である。それは大自己への意志、あるいは神の意向に適った自由への意志でなければならない。

しかし、せっかくの欲求エネルギーを、効率よく自己拡大に振り向けさせるにはどうしたらよいのだろうか？確かに、大自己への意志を涵養することが本質であるとしても、ここでは、今できること、すなわち利害の対立する個々ばらばらな世俗的欲求が乱立する状況で、可能なことを考えてみる。それは、当然のことながら、公序良俗に反しない形で、多かれ少なかれ共有する世俗的欲求を刺激することでなければならない。

それには、たとえば、次のような学費前納方式が考えられる。

- 学費は、貸付制度を設けて、あらかじめ全額を支払わせる。
- しかし、規定以上の単位を取れば、単位数や成績によって、5割から最高8割まで、返還する。
- 8割の返還を受けた学生は、顕彰碑に名を刻み、就職希望先に大学から特別の推薦状を出す。あるいは、留学を支援する。
- 成績が平均未満の退学者には原則として学費を返還しない。

要するに、返還金や名誉、それに就職・就学への好条件を梃子にして、学習を奨励するわけである。さらに、

- 成績優秀者には、後輩の指導を委託し、成功報酬を支払う。

などを追加して、学外のアルバイトより高収入で、勉強にもなるような方法を考える。すると、成績優秀者の中には、実質的に学費を全く払わずに、卒業し就職する者も出てくる可能性があって、それが後輩への良い刺激になる。もっとも、端から卒業が危ぶまれる学生は、入学を自主規制することになるかもしれない。こうした方式は、自律性と余り干渉し合わないから、知欲の士にも、生命欲の士にも受容られやすい。広く研究してみる価値があるかもしれない。

しかし、こうした遣り方は、個々の授業のあり方とは無関係であるから、学びの意味も考えずに、闇雲に単位を取ろうとするような学生も現れるかもしれない。それでは真の自己拡大には寄与しない。したがって、各授業では、学びの意味を明確に捉えていないと、好成績が残せないように、十分配慮する必要がある。餌欲しさに芸をするような学生を作り出してはいけない。

VIII. おわりに

多くの学生たちは、長い知欲の冬眠状態のために、ものごとを学習することに非常に不慣れである。基本的な図式はどのようなものか、それらの図式をいかに組み合わせたら、ものごとが再現されるかといった半意識的操作がほとんどできていない。それではどれだけ時間をかけても、学習として成立しない。彼らは恐ろしく無知である。非常に幼く感じるのはそのためかもしれない。気の毒ではあるが、彼らの知欲が回復する見込みはない。筆者の世俗欲と同様である。無いものをねだっても仕方がないから、彼らが今強く抱えている世俗的な欲求を梃子にして、自己拡

大を支援できないものかと考えてみたのがこの小論である。これは、筆者のような世俗的欲望ジェネレータの発達障害者が、そうした欲求をも教育の梃子にすべきだと主張しているところに価値があるのだと思っていきたい。

ただ、無秩序な方向にあふれ出る小さな欲求の流れでは、活用は難しいので、大自己の実現に向けた大きな流れを作り出すことで、自己拡大のエネルギーに変換せねばならない。理想は、こうしたエネルギーによって、自律的/集団自律的に自己拡大を果たしていくことであるが、現行の学生のように大自己を志向する準備が出来ていない場合には、学費前納方式などを活用して、少なくとも冬眠させてしまうことを防がねばならない。自己の拡大に覚醒すれば、生態論的精神性を唱道することも^{xxx}、ある程度可能であろう。

いずれにしても、知欲、生命欲、そして世俗的欲望の土の教育は、基本的にそれぞれ分離し、それぞれを格段に充実する必要がある。ただし、それぞれの教育を受けている学生たちの異文化交流ということも、人間の幅を広げるために不可欠である。知欲で拡大された自己が、必ずしも神の意向に適うわけでもあるまい。人間はどこまでも有限の存在であって、現象化できる世界は限られているからである。たとえば、彼らは、知欲を失った人間たちの世界をなかなか想像できない。知欲を世俗欲や生命欲に置き換えても同じであろう。同じ歴史の中にいて、別の世界を見ているのは、調和ある社会生態系を目指すことはできない。人間は、自己拡大に用いた欲求の種類にかかわらず、最終的には、互いに他の世界を自分のものとせねばならない。この部分の自己拡大の梃子は、もはや個々の小さな欲求ではありえない。それは自然さを求める自由への欲求、大自己への意志でなければならない。教育体制の分割などは、自由への欲求を生成し、それを梃子にできるようになるまでの、当面の措置であろう。

注・参考文献

ⁱ Arne Naess, *Ecology, community and lifestyle*, Cambridge University Press, 1989.

ⁱⁱ Ibid. Introduction/ Ecosophy T: from intuition to system. 生態学的世界観を導く個人的な哲学的演繹法を指している。

ⁱⁱⁱ Ibid. 7 Ecosophy T: unity and diversity of life, 8 The systematization of the logically ultimate norms and hypotheses of Ecosophy T, (b) Formulation of the most basic norms and hypotheses.

^{iv} Agenda21: 1992年にリオ・デ・ジャネイロで開催された地球サミットで採択された持続可能な開発を実現するために実行すべき行動計画。ISO14000 シリーズは、その具体化。

^v 丸山 博道、啓蒙の再生と普遍道徳の役割について、名古屋経営短期大学 紀要 44 号、2003、II. 事例に観る啓蒙の病態、(07) 想念世界と外界との癒着。III. 啓蒙の欺瞞性、2. 神話の解体と普遍道徳。

^{vi} 丸山 博道、存在性の諸命題、名古屋経営短期大学 紀要 42 号、2001、IV. 脱近代の道徳性、3. 存在性の把握に基づいた普遍道徳。V. おわりに、3. 普遍道徳を志向しない教育は、知の空疎化を助長する。

^{vii} 丸山 博道、Ecosophy の第一原理と道徳性、名古屋経営短期大学 紀要 45 号、2004、II. Ecosophy の第一原理に置かれるべきもの—存在性の立ち上げ—

- viii 丸山 博道, 現象化能力の育成について, 名古屋経営短期大学 紀要 47 号, 2006.
- ix 大島 純, メタ認知的ツールとしての CBLEs, 現代のエスプリ 497, 2008.12, 最後の砦: 認識論的な意識改革.
- …実はメタ認知というメカニズムも, それを利用しようとする認識論的な自発性 (epistemic agency) がないと利用されないのである. …
- x 丸山 博道, 知性のために教育はいかにあるべきかⅢー交流分析的観点による自我の育成と知の復興ー, 名古屋経営短期大学 紀要 49 号, 2008, V. 性急な社会化がもたらす知の損壊, 3. 理想的な自我育成に関する交流分析的命題と現況との落差.
- xi 大島 純, メタ認知的ツールとしての CBLEs, 現代のエスプリ 497, 2008.12, 最後の砦: 認識論的な意識改革.
- xii 三宮 真智子, メタ認知を育む効果的な方法とは, 現代のエスプリ 497, 2008.12, ニ メタ認知を育む PIFS (practical intelligence for school: 学校に必要な実践的知能) プロジェクト, 2 PIFS 授業の進め方, 3 PIFS プログラムの評価と意義
- xiii PIFS プログラムの短期的効果については, 三宮の指摘の通りであろうと推察するが, それが長期的な自発性を保証しているわけではないというのが, 丸山の考えである.
- xiv 知欲を有する者たちへの教育のあり方としては, 三宮の主張は正論である.
- xv 丸山 博道, 知性のために教育はいかにあるべきかⅢー交流分析的観点による自我の育成と知の復興ー, 名古屋経営短期大学 紀要 49 号, 2008, V. 性急な社会化がもたらす知の損壊, 1. 特異な学生の事例, 2. 性急な社会化の圧力と知の損壊.
- xvi 丸山 博道, 知性のために教育はいかにあるべきかⅢ, 名古屋経営短期大学 紀要 49 号, 2008, IV. 行過ぎた商業主義からの脱皮, 2. 生産プロセスとしての真の子育て.
- xvii Ibid.
- xviii 板倉 昭二, メタ認知は人間にのみ固有な現象かーメタ認知の系統発生と個体発生, 現代のエスプリ 497, 2008.12, 三 メタ認知の個体発生, 2. 心の理論におけるメタ認知の発生的起源, 3. 乳児におけるメタ認知.
- xix 丸野 俊一, 心を司る「内なる目」としてのメタ認知, 現代のエスプリ 497, 2008.12.
- xx 杉山登志郎, 小野次朗 監修, 足立佳美 監訳, 坂本輝世訳, 自閉症/アスペルガー症候群 RDI「対人関係発達指導法」ー対人関係のパズルを解く発達支援プログラム, クリエイツかもがわ, 2006. 原著: Steven E. Gutstein, AUTISM/ASPERGERS: Solving the Relationship Puzzle, 2000.
- xxi 丸山 博道, 知性のために教育はいかにあるべきかⅡ, 名古屋経営短期大学 紀要 48 号, 2007, I. はじめにーRDI の示唆するもの.
- xxii 内田 伸子, 文章産出過程でのメタ認知の働きー物語の産出過程での「内なる他者の目」の発達, 現代のエスプリ 497, 2008.12, ニ メタ認知機能の発達.
- xxiii 金城 光, ソース・モニタリングの発達ー記憶の出どころを探る能力の生涯発達, 現代のエスプリ 497, 2008.12 子どものソース・モニタリング能力.
- xxiv 丸山 博道, 知性のために教育はいかにあるべきかⅡ, 名古屋経営短期大学 紀要 48 号, 2007, II. 基礎学力についてー計算原理から演算系を構築する力.
- xxv 三宮 真智子, メタ認知を育む効果的な方法とは, 現代のエスプリ 497, 2008.12, 三 メタ認知を育むその他の学習支援法, 5. 教師自身が教え方についての自らのメタ認知を高めること.

…ある教え方が効果的か否かは、授業の目的や状況、学習者特性などにより変化する。どのような場合にどの方略を使えばよいかを理解し、自分の不得意な方略をも意識的に用いようと努めることで、生徒の学習の質を高めることが可能になる。学習者のメタ認知を促すためには、教師が自分自身の教え方に対してメタ認知を十分に働かせることが鍵となる。…

xxvi 丸山 博道, 知性のために教育はいかにあるべきかⅢ－交流分析的観点による自我の育成と知の復興－, 名古屋経営短期大学 紀要 49 号, 2008, V. 性急な社会化がもたらす知の損壊, 2. 性急な社会化の圧力と知の損壊

xxvii Arne Naess, Ecology, community and lifestyle, Cambridge University Press, 1989, 4 Ecosophy, technology, and lifestyle, 4 Technology and lifestyle.

xxviii 丸山 博道, 知的スキーマの包括理論から見た幸福について, 名古屋商科短期大学 経営研究所年報 10 号, 1998.

xxix 福沢諭吉, 福翁自伝, 岩波文庫, 緒方の塾風.

xxx 丸山 博道, 関係場と存在－生態論的精神性のすすめ, 名古屋経営短期大学 紀要 43 号, 2002.